

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アラスカ先住民イヌピアックとホッキョククジラの関係の変化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード: 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4599

■ アラスカ先住民イヌピアックとホッキョククジラ の関係の変化

岸上伸啓 (国立民族学博物館・総合研究大学院大学)

アメリカ合衆国アラスカ州北西沿岸地域に住むイヌピアックは、紀元後1000年ごろからホッキョククジラを捕獲し、食料資源や道具を製作するための原材料として利用してきた。この捕鯨を通してイヌピアックは、ホッキョククジラと特別な関係を形成している。本報告では、その関係の特徴と歴史的な変化を報告した。

ホッキョククジラは成獣で体長が約15メートル、体重が約50トンある巨大な海棲哺乳類であり、季節的に回遊する。クジラの体の70%は食料資源などに利用することができる。報告者の調査地であるバロー村には約55組の捕鯨グループが存在し、クジラが村の近くを回遊する春と秋に捕鯨に従事している。この捕鯨は、国際捕鯨委員会のもと先住民生存捕鯨として年間あたりの捕獲頭数に条件が課せられたうえで、実施されている。捕獲したクジラの肉や皮脂は、ルールに従って関係者や村人に分配されるとともに、ナルカタック祭やクリスマス、感謝祭の村全体の祝宴で消費されている。捕鯨と獲物の分配・消費は、現在のイヌピアックにとっても重要な社会・文化・経済・政治的な活動であり続けている。

イヌピアックは、クジラは彼らの話を聞き、行動を見る能力を持っており、人間のために自ら意図的に命をささげると信じている。そしてクジラが特定のハンターに捕獲されにやってくるのは、そのハンターの妻にひきつけられるからだと考えている。ハンターが、靈魂が宿るとされているクジラの頭部を捕獲後に海中に戻し、彼の妻がほかの人々に対し寛大に振舞うかぎ

りは、そのクジラが再生し、同じハンターのもとに再び捕られるために戻ってくると信じられている。このため、イヌピアックは捕鯨を聖なる活動であると考えている。

このイヌピアックとクジラの特異な関係は、基本的に現在でも継続しているが、この100年余りの間にいくつかの変化が起こった。第一の変化は、イヌピアックがキリスト教を受容したため、クジラを彼らに遣わしているのは、キリスト教の神であると考えようになり、クジラとともに神に対して感謝の祈りをささげるようになった。第二に、グローバル化や国民化の進展によって、イヌピアックが多様な経済活動に従事するようになり、生活様式も多様化しつつある。このような社会変化の中で、捕鯨はすべてのイヌピアックがかかわる活動ではなくなりつつある。一部のイヌピアックにとっては、クジラは観光資源や保護の対象になったり、クジラの皮脂は食べても、肉を好まない若者も出現したりしている。このように歴史的に形成されてきたイヌピアックとクジラの関係は変化しつつある。